

光の子



No.110 2004.11.1

●今年の聖句 悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。(ペテロの手紙Ⅰ：3：9)



「すすきの土手で」

挿絵・中島英子

「新涼」

浜木綿にひたすら通ふ波の音

哲学の道に拾ひし落し文

捨て猫にかたまってゐる浴衣かな

男勝りの香水を匂はする

新涼や一行だけの置き手紙

月さしてより騒ぎだす真葛原

ひぐらしや形見の帯の真くれなる

黛 まどか (『ヘップバーン』主宰)

2つの文化に生きる

43

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

暑い暑い夏がようやく終わりを
つげた。彼岸花も暑さの中、あつ
という間に満開になり、散ってし
まった。「暑さ寒さも彼岸まで」
という言葉があるが、今年はこの
言葉があまり肌で感じられず、い
つまでも暑さの残る長い夏だっ
た。

幸いにも私はこの猛暑の日本を
離れて一〇日間ほどハワイで過ご
した。毎年夏にハワイ大学でバレ
ーボールの講習を受けていた娘に
今年も高校生活最後の夏休みだか
らという理由で私も同行させても
らったのだ。来年たぶんアメリカ
の大学に行ってしまおう娘と、休
みの間はできるだけ行動を共にし
たというのが、実は私の本音だっ

た。二人だけで飛行機に乗ったの
も多分初めてではなかっただろう
か。また、日本では夫と息子が二
人暮らし、ハワイでは娘と私の二人
旅というこの家族配分は今までに
ないものでお互いに貴重な経験を
させてもらった。

さて、ハワイでは娘の同級生の
お宅に泊めさせていただいた訳だ
が、到着した初日にお宅にたどり
ついてみると兄弟姉妹友達など全
部合わせて子どもが九人と大人三
人の合計十二人の共同生活が待っ
ていた。毎日バレーボールの練習
で汗びっしょりになった衣類が洗
濯機に放り込まれ、洗濯機と乾燥
機はいつも回りっぱなしだった。
ハワイ大学のバレーボールは全米
でもかなり有名で毎日夕方までく
たくたになつて練習し、時差ぼけ
もあつて夜は早くから眠つてしま
うのがこの旅行の前半だった。後
半はバレーボールの講習も終わり、
娘と二人で買い物に行ったり、テ
ニスをしたり、ビーチにも2、3
回行き、さんご礁とエメラルドグ
リーンの海をのんびりと満喫した。
この「のんびり」という言葉だが、
ハワイは「のんびり」が本当にび
ったりである。現地に住む友人に
聞くと友達と待ち合わせして、時

考えられたことでした。
その第一報から五時間後、かず
き君は亡くなりました。
病室で顔を見ても、付き添つて
いても命の重大な危機に気付くこ
とができなかったこと、何より彼
の痛み、苦しみ、叫びを受けとめ
られなかったことを消し去ること
はできません。それでも最後にと
ても穏やかな優しい顔を向けてく
れました。呼びかけにはただの一
度も応えてくれはしませんでした
が。

死を受けとめる、ということが
どういふことなのか今もわかりま
せん。ただ、かずき君には恥ずか
しくないような生き方をしよう、
と思うのが精一杯です。

召天一周年記念礼拝、それに続
く夕食会には百名を超える方々が
集まって下さいました。東大宮教
会の方々、原道小学校の先生方、
後援会を中心とした町の方々、そ
して彼と関わった元職員やボラン
ティア、共に暮らした卒園生。か
ずき君の、そしてかずき君が大好
きだった人々たちです。不思議なほ
ど思い出の多いかずき君。よく笑
い、よく泣き、たくさん遊び、騒
ぎ、怒り、ケンカし、中でも嬉し
さの表現が輝いたかずき君と、そ

間通りに来る人は殆どいないのが
まあ普通だそう。また、遅れて
きてもお互い怒らない。ハワイに
こんな文字のTシャツがある。
"Thinon Hawaiian time: (私、ハ
ワイ時間で行動します) 日本で
時間に遅れる時に着ていくと便利
だと日系の友人が言っていた。遅
刻したらハワイののんびり文化の
せいに行けるからだ。遅れる理由
は何だろうと考えてみたが、現地
の人はとても話好きで家族や友達
と時も忘れて話こんでしまい、あ
あもうこんな時間だ、と時計をみ
て初めて時間が判る感じである。
のんびりと海を眺めていて時間が
たつのを忘れることもあるのかも
しれない。

この旅行で私はどうしても行き
たいところがあった。「ハワイプ
ランテーションビレッジ」である。
ハワイの歴史を知りたかったから
だ。ホノルルからバスで一時間ほ
ど北にある以前サトウキビ畑だつ
た土地に建てられたこの村は当時
の生活をありのままに再現した建
物が並ぶ村でボランティアのツア
ーガイドが案内してくれた。外国
人がもたらした伝染病などでハワ
イ原住民が激減して、低賃金で雇
える中国人、ポルトガル人、日本

渡部かずき君 召天一周年

竹花 信恵

「天国じゃなくて、ぼくは、か
ずき君に、ここに、この家について
ほしかった。」ひとつ下の弟は、た
だ一人の兄かずき君の召天一周年
記念礼拝の直前、遺影の前に涙を
流しました。「かずき君がいない。
この家にはいない。」ということに私
たちは少しづつ自らを慣らしてい
ったような気がします。お互いの
存在をまるで自分自身のように感
じて育った弟は「お兄ちゃんの分
まで頑張る」と前を向いて突っ走
ってきたような日々、彼の発した
言葉で改めて悲しみの深さに寄り
添う一周年記念の日でした。

あの日、昨年九月五日、夏休み
が終わり、順調に二学期がスター
トした日から五日目。笑顔で登校
したかずき君たちに「行ってらっ
しゃい」と声を掛け、私はホッと
一息、電車で外出しました。その
夕方、人混みの中鳴った携帯電話
で、かずき君が事故に遭ったこと
足を骨折したことを命に別状はな
いという言葉と共に知らされまし
た。すぐに引き返す私には、お見
舞いのCDを選ぶために店に立ち
寄る余裕がありません。暗い夜が
苦手で、ひとりぼっちがキライで、
怖がり、繊細で甘えん坊のかず
き君が入院するということがだけ

れぞれが思い出を抱えて集まつて
下さいました。
当日の午後には六年生のクラス
メイト全員が集まってくれ、かず
き君とおやつを食べ、話し、そし
て透き通る歌声をプレゼントして
くれました。彼らを迎えた時、思
わず「大きくなったね」と声をかけ
てしまいました。一年、という時
間は人をこんなに成長させるもの
なんだということを実感しました。
八月二十一日、十二歳になった
かずき君の身長と体重はあの時の
ままです。成長する時、可能性に
溢れる大切な時を生きていたのだ
ということを美しい歌声を聞きな
がら思いました。夜九時四十八分。
彼の命が失われたこの時間には、
職員、そして自主的に集まってく
れた中高生と共に礼拝、祈りの時
をもち、この日が終わりました。
友だちには「サッカーの選手に
なりたいたい」と夢を語っていたよ
うですが、私には「大きくなったら
ここで働いていい？」と聞きまし
た。「この職員になるー」と笑顔
で言っていたかずき君を忘れませ
ん。

毎月五日は「かずきの日」です。
かずきを偲び、自分の命と人の命
の大切さを考え続けていきます。

人、韓国人、ノルウェー人、プエ
ルトリコ人、フィリピン人が移民
労働者として受け入れたサトウキ
ビプランテーションの最盛期（一
九〇〇年〜一九三〇年）の模様が
よく分かった。決して裕福な生活
ではなく、当時ハワイの経済を支
えていた外国人労働者の中に日本
人が含まれていた事実があった。日
本人を含むその頃の移民労働者の
子孫が今のハワイの一部を造って
いることは間違いない。

帰途のバスの中は、アジア系の
人たちがかりだった。多分フィリ
ピン系の人たちだと思いが何やら
大風呂敷に一杯詰めてそれを背負
って移動していた。食べ物運ん
でいたのだろうか、その身なりか
らして決して裕福な生活をしてい
ると思えない。この人達もあの
外国人労働者の子孫なのだろうか
と思った。

ハワイといえれば響きは華やかだ
がワイキキビーチや高級ホテルが
立ち並ぶホノルルだけがハワイで
はないのだと身をもって感じ、も
う少しゆつくり住んでみたい島だ
と思いつつ日本に帰ってきた。

最初に中国を旅したのは、寄生虫学講座の教授に就任して間もない頃だから二〇年以上も前のことである。北京空港のトイレが汚れていたことと、中国の人達が皆親切だったことを記憶している。調べ直してもらったところ、今回は六回目の中国訪問ということである。数年前訪れたときも、北京から天津に到着

学者もどきのつづやき ⑥4

「中国の旅ふたたび」

山形大学 仙道 富士郎
山形大学 山形 仙道 富士郎

高速道路の両側にいわたる万戸が建ち並び、その変わり様に驚いたが、今回の変容ぶりにはただ嘖然とすばかりであった。

まず仙台―長春直行便で姉妹校協定締結の相手校である吉林大學のある長春市に向かった。旧満州の関東軍司令部の建物など我が国の愚行の跡を何とも複雑な気持ち

で見学しながら吉林大學に向かった。たまたままだ平常な気分であったが、大学のキャンパスに一歩足を踏み入れた途端、あまりにも立派な新しいビル群の林立にすっかり圧倒されてしまった。本郷の東大キャンパスもいつ訪れても工事中で、地方大学の一学長としては何ともうらやましい気持ちで眺めているのだが、ビルの大きさからしてとても東大などかなわない。さらに驚いたことに、大きなビルのロビーに韓国の財界の大物の銅像が鎮座しており、その人の寄付でビルは建てられたというではないか。

ビルラッシュの様は上海でその頂点に達する。高層ビルの密度はニューヨークのマンハッタンが世界一だと思いが、高層ビルの全体数から言えば、上海の方がマンハッタンに勝っており、あつという間に上海は世界第一の都市になってしまった感じである。しかし帰国してから聞いた話では、夜景で見ると多くの上海のビルは真つ暗で、機能しているビルは少ないのだということである。いずれにしても中国人には失礼な言い方になるが、私は今回の中国訪問で、この国に何か異様なものを感じた。

中国の人達自身が国の最近の成り行きに疑問を抱いている節もうかがわれた。

複数の人達から、田舎の秀才が高等教育を受ける機会を失いつつあり、困ったことだという話を聞いた。どういふことかと尋ねると、中央と地方の収入格差が次第に広がり、地方に住んでいる人の収入では子どもを大学に入学させるのは困難な状況だという話である。新聞などで報道されている中国における経済発展の地域格差の実例をまのあたりにした感じであるが、それにしても、少なくとも社会主義国と呼ばれている中国において教育の機会均等が失われつつあるということは、何かこの国の将来に危ういものを覚えさせて仕方がない。

今回の訪中の第二の目的は、現在蘭州医科大学の副学長をしている教え子の景教授を訪問することであった。景さんは、毎年一〇〇人の中国医学研究者を日本に留学させる笹川財団(現日本財団)プログラムで私の教室にやって来て、一年半で医学博士を取得して帰国した大秀才であるが、一〇年間で一まわりも二まわりも大きくなった感じで、大学全体の牽引者として

て活躍していた。円借款で数億円の資金を日本政府から獲得し、山形大學にもまだない新しい実験機具を備えて、新しい研究を展開しようとしている。その成功を祈るばかりである。

蘭州医学院のパーティでチベットのから来ている看護師さんの歌を聞いたとき、私は一つの感慨にふけった。それは「同じアジアと言ってもこんなに違うのだ」ということ。あんなに清みわたった声を私はこれまで聞いたことがない。まさに声帯が違うとしか言いがたない。チベット高原に響きわたる彼女らの恋歌のことを想像するとき、それは我々日本民族にとっては全くの別世界と言えるであろう。「アジアは一つ」などと誤知りの言辭は弄しまいとそのとき思った。



エッセイ

通草

これは裏話である。裏話が表に出してしまうと、多少まずい点もあるかも知れないが、他の人にまずい思いをさせる事はなさそうなので、マ、良いか、と思う。

私は、或る俳句誌にかかわっている。二十七年くらいになるうか。二十七年というと、大分長いようだが、私にとっては決して長くはなく、何となく過ぎてしまった感がある。それは、ずっと楽しい時間として思い出されるからである。

かかわってきたと言っても、俳句を作るわけではない。私は、俳句を作るだけの知識も教養も持ち合わせていないから、作らない方が無難である。作らなければボロは出ない。

二十七年間のかかわりは、毎月の俳誌の表紙を描かせていただいている、というかわりである。編集長から送られてくる表紙のテーマに従って絵を描けばよいのである。

今年の新年号はサル年に因んで「猿」であった。そこで、何十年ぶりで動物園に入り、猿山でスケッチをした。猿の行動は大変おもしろい。見物の人間共など完全に無視し

彫刻家 中島 陸雄

て、自由に動き回る。しかし、スケッチをする側にとっては困ったものである。少しはじつとしていてもらいたい。それでも何とかスケッチをして、家に帰ってから画面の構成を決め、色をつけてみる。色は二色までと決まっている。それに、表紙絵のことは短い文章にして書いておけば、印刷会社の若いSさんが取りに来てくれるという順序である。私にとつての楽しい作業はこれで一区切りである。これを毎月繰り返す、という訳だ。

順調にいけばこうなのだが、たまにはこんなにならなく進まない事もある。

十月号の表紙は「通草」であった。これは一体何と読むの?どんな意味?私にはわからなかった。読み方も意味もわからないでは絵は描けない。私は家内に聞いてみた。「通草」これ何と読むの?意味は?ところが、彼女も私と同程度に浅学非才であった。「わかんない。」これが答えである。

しかたなしに私は、何種類かの辞書を引いてみた。あつた。「通草は

つうそうと読み、カミヤツデの別名である」と出ていた。しからばカミヤツデとは何ぞや。何種類かの植物の本を調べてみると、あつた。ヤツデの仲間である。幸いにも写真花が咲く植物である。幸いにも写真まである。私は、その写真を参考に、何とか表紙絵を描きあげた。

表紙絵のことは「カミヤツデは戦後の東京にもたくさん見られたが、冬の寒さには耐え切れずに枯れた」という事である」というような本の説明の丸写しをした。

こんなことで、いろいろと調べた上でやつと描き上げた私の美しい絵が十月号を飾る筈であった。何日か後、電話が入った。「モシモシ:」きれいな女性の声である。「やあWさん、しばらくですわね」と私は対応した。Wさんは、「今、俳誌の校正をやっているのですが、表紙絵のことは読んでみますと、ちよつとちよつと感じがするんですよ。通草はアケビなんですけど。」とおっしゃる。

私は慌てた。何だ、アケビなのか、とんでもないトンチンカンな絵を描いてしまったものだ。アケビならば、正に秋の植物だ。秋の季節にもなっているかも知れない。私は大慌てで印刷会社のSさんに

電話した。「表紙の絵が間違っていたんですよ。描き直したいんですが、今からで間に合いますか?」「今日中なら何とか間に合います。しかし、色校正は時間的にムリです。」との事。こうなったら賢沢は言っていたらいい。色の具合はSさんの感性にまかせる事にした。

アケビならば家の裏の方に何本かある。しかも都合良く実もなっている。あれを取ってくれば良い。更に都合の良い事には、アケビの実をスケッチし、色を付けたのが何枚かある筈である。こうなると描き直すなんてオチャノコサイサイである、と言いたくなってくる。勿論、表紙用に画面構成を作り直す必要があるが、Sさんは予定の時間より早く絵を取りに来てしまった。まだ描きあがっていない。私はドロナワ式で必死に描いた。ドライヤーで絵の具を乾かしながら、Sさんにコーヒを飲んでもらいながら待つてもらって、何とか描きあげ、ギリギリで間に合わせた。冷や汗。

この俳誌の十月号を手取る人は、ごく少数の人を除いて、こんなドタバタの裏話は知らない筈だ。したがって私も、知らんふりをするつもりである。

プロム

河のほとりて 倉澤家

夏休みも半分が終わった頃、倉澤家に仲間が一人加わりました。二歳の葵ちゃんです。担当者も家も変わり、不安をたくさん抱えてやってくるだろうと身構えていました。そんな心配をよそに新しい生活にもすぐ慣れ、楽しく生活しています。しかし、彼女に快適な生活を保障する為には周囲の者たちの、努力と忍耐があったのです。

一番大きな影響を受けたのは、今まで末っ子だった四歳の成毅です。担当者が抱っこしてあげられる時間は減少し、すぐに手の出でしもう葵に叩かれたり、つねられたりして泣くことが増えました。担当者に向かって「倉ちゃん大好きだからね。」と言葉で確認することが多くなり、そんな彼を見ていると心が痛みました。お姉ちゃん達も担当者が多忙になった分、手伝うことが多くなったり、幼児一人増えたことで今までの二倍も三倍も賑やかになり、ゆっくりテレビを観ることもできなくなったりと生活に変化がありました。

こんな風に、一番弱い者の為にひとり一人が少し努力をしたり、我慢をすることのできる倉澤家のメンバーを、とても誇らしく思っています。二歳の葵にとっても、もうすぐ社会へ出て行く十八歳のヒロミにとっても居心地の良い家作りを子どもたちと一緒にしていきたいと思っています。

倉澤 智子
心理室から

私の大好きな食欲の秋がやってまいりましたが、皆様、どのようにこの良い季節を過ごされるのでしょうか。

こちらでは今年度三人の子どもが高校受験を控え、勉学の秋を迎えています。しかし勉強に取り組み続けるといのは大人でも容易ではありません。子どもたちもみんなイライラして、逃げ出したい気持ちにかられながらも、なんとか走り始めたというところなんです。ここにいる子どもは公立高校の受験しかできないという制約があります。しかも進学が叶

わなければここの生活さえも保障されません。十五歳という年齢で、将来を大きく左右しかねない試験に臨まなければならぬというプレッシャーは、おそらく私の想像以上のものだと思います。この子たちがその壁に立ち向かうことに伴走し、応援することしか私たちにはできません。生活の中に優しさやユーモアを溢れさせ、辛い状況に立ち向かっていくエネルギーにする、そんな生活を創ることができたら素敵だなと思います。そして最終的にそれぞれが希望の高校に進学できることを心から願ってやみません。

積 みどり
子どもたちの季節 仙道家

まだ日焼けの跡が残る子どもたちを見ていて、あの暑い夏の出来事が見えなくていいなと思います。四日間という長い夏休み、毎年たくさんの方々のご好意に支えられ様々な体験をすることができました。仙道家では、お盆の時期、吉田兄妹、武、姫香、摩耶、龍治が小西指

導員のご両親所有の別荘へ出掛けました。秋田まで車での長旅です。ドライバーは小西指導員。私や子どもたちは騒いだり、眠ったり好き放題で小西指導員の忍耐力アップに協力しました。

朝四時過ぎに発し、昼過ぎに着きました。昼食後、早速プールへ。二日は海へ。和哉は若いカップルに遊んでもらい二人だけの時間を邪魔し、三日目溪谷で川遊びをした時も若者たちと一緒に泳いだりと人類みな兄弟よろしく見知らぬ方々とも仲良くしていました。知らない人いきなり話しかけるのはおかしいんだよ、と和哉に言いながら、きつと、きつと見知らぬ方は滅多に和哉のことを叱ったりしないからなのだろうと、その理由を我が身にあることを確認し、四日目の田沢湖でも楽しく過ごし五日目に秋田をあとにしました。



池田 祐子

原田家日記

暑い夏も元気に乗り越えて迎えた二学期、幼小中学校各々輝く笑顔の中、運動会が開かれました。

高校生はいえ文化祭シーズン。個性を生かし十分に楽しめたようです。そんな中、少し迷い道に立ち、悩んでいるのは高2の友美です。幼い頃からここ、光の子どもの家で育ってきた彼女は根が優しく飾らない、それでいてどこかとぼけた性格のかわいい女の子です。

そろそろ進路について考える年齢となりました。ある夕食会後、二人で居ると「うち、何が向いているかわからないよ、自分でも」と涙目でポロリとこぼしました。普段は「うち、パティシエか海女さんになるんだ。」などと笑っているのが嘘のようです。

不安な気持ちと思うと、こちらも少し胸がつかまるような想いを持ち、適切なアドバイスすらできない自分が情けなくなります。少しでも彼女が広い世界を持てるように一緒に学び、考え、多くの方にアドバイスを求めていきたいと思う今日この頃です。

北谷 優佳
季節のおとずれ 市川家

めつきり秋めいて参りましたがいかがお過ごしですか。

子ども達はそれぞれ大きく成長していると感じる今日この頃です。六月某日、真っ白な顔に赤い紅をひき、可愛いというより綺麗な着物を着た美季は、日舞の先生にお稽古を受け、先生をはじめ多くの方々の励まし、お心遣いのおかげでとてもいい顔をして立派に最後まで踊る事ができました。日舞の発表会当日には学校の先生、お友達も来てくださり、お姫様になった、そして達成感、皆に支えられている事を感じた目だけのように思います。この場を借りて、美季の成長を暖かく支えてくださっている方々に感謝申し上げます。

静一は、小学校の運動会でリレーの選手になったと言って、とても張りきっていました。当日は、天気にも恵まれ、運動会日よりでした。リレーは一人でやるものではなく、同じチームの仲間同士が一つのバトンをつなげていきます。静一もチームの一員として一生懸命に走っていました。真剣に走っている姿がとっても格好よく、大事な事を教えてもらいました。

双子の要と美也子もつい先日運動会がありました。

いつもよるよろしい、頼りなさそうな要ですが、心も体も大鼓に集中して叩いている姿には目頭があつくなりました。(ちなみに曲はキンキキッズのフラワーでした)美也子は、運動が大好きでかけっこも綱引きも一番だと言っていたのですが、本番、負け知らずだった美也子のいるチームが綱引きで負けてしまいました。負けた瞬間、美也子は悔し泣きをしていました。

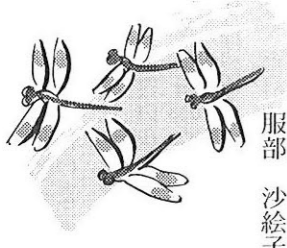
市川 美穂
光の中で 佐藤家

今年も長く暑い夏休みでした。子ども達が楽しく素敵な思い出をたくさん創り、心も体も大きく成長できることを願って迎えた夏休みでしたが、私は体調を崩したり心穏やかに過ごせなかったりと子ども達に向き合うことの出来ない日々がありました。

子ども達を支えることも出来ず、却って心配を掛け、不安にさせている私は子ども達と一緒に居合わせる

べきではないと自分自身を追い詰めていました。担当者が揺れている姿を目の当たりにさせてしまいました。達を更に落ち込ませてしまいました。しかし、子ども達は必死に助けてくれました。「私は服部さんのことが大好きなんだよ！」と叫びながら涙を流した華美。黙って私の顔を見ながらずっと傍に居てくれた宗和。「いつも服部さんを困らせてごめんね。これからお手伝いをするから早く元気になってね。」と書いた手紙をくれた悠花。私が暗い表情をしていると「ごめんね。ごめんね。」と繰り返す勇気。そんな子ども達が私に笑顔を取り戻してくれました。

今子ども達と一緒に生活できることを嬉しくも、こんな私と一緒に生活せざるを得ない子ども達に対して申し訳なくも思います。今度こそ私が子ども達のために心と力を注げるよう気持ちを新たに努力していきます。できればいけないと思っています。



服部 沙絵子

現場から

続・光の子らしく

⑬

岩崎 まり子

庭にあんなに溢れかえっていた
蝉の声が、いつの間にか虫の声に
とって替わっていました。子ども
たちが裏から大事そうに抱えてく
るものも、ザリガニから栗や柿の
実に変わり、季節の移ろいを感じ
られる生活の豊かさに感謝してい
ます。

皆様、お元気でいらっしやいま
すか。

二歳でここへやってきた里奈ち
ゃんも早いものでもう小学生。

時折、嬉しそうに照れ笑いな
がら「内緒ね。今日、お休みした
いの。」と言うことはありますが、
大抵は「今日、凶工があるよ。」
とか「今日の給食、雪見大福だけ

ど！」等と水を向ければ「やっぱ
りお休みしない。」という程度で
取まっています。ただ、そういう
ときには「途中までお迎えに行く
からね。」と、曲がり角まで手を
つないで送り出し、帰りも時間を
見計らってお迎えに行きます。

ランドセルから頭と足が出てい
るような小さな体で遠くから私を
見つけ「ママー！」と駆けてくる
里奈ちゃん。勿論、彼女は私の子
どもではありません。ここでは、
大人も子どもも呼び方は自然発生
的です。強制はなく、何となくそ
ういう風になったという流れの中
で、時々、担当者を「ママ」「お
母さん」と呼ぶ子どもも出ていま

す。里奈ちゃんもその一人ですが、
いつも「ママ」と呼ぶわけではあ
りません。体裁はあまり関係なく、
学校の友人の前で「まり子さん」
と呼ぶこともあります。本人が甘
えたいとき、不安なときに「ママ」
と呼ぶようです。

あるとき、他児から「皆のママ
だろ」と言われた里奈ちゃんは、
すごい剣幕で「違うもん！里奈の
ママだもん！里奈のママは死んじ
やっただから。まり子さんは里
奈だけのママなの！」とまくした
てました。

「ママじゃない」という事実を
知りながら「ママ」と呼ばずには
いられない里奈ちゃんの心の穴。
夕日を受けて、キラキラ光るよう
なねこじやらしのあせ道に佇み、
「小さくなって、ここに住みたい
な。」と、思わずこちらがくすぐつ

たくなるようなことを普通に言う、
その心にぼつかりとあいた大きな
穴を見ないわけにはいきません。

若い頃は、変な自意識や自負心、
本当の親御さんへの遠慮等があり、
「ママ」と呼ばれても瞬時に「ママ
じゃないよ」と訂正したこともあ
りました。今思うと、何て残酷な
ことをしたのだろうと後悔で胸が
一杯になります。「ママ」と呼ぶこ
とで、また、「はい」と応えられる
ことで、それでその子どもが一瞬
でも満たされ、笑顔になれるのな
ら、私は、何度でも、いつでも
「はい」と応えたいと思います。

「里奈、ずっと小さいままがいい
い。だって大人になってもずーつ
とママに抱っこするんだもん。」
一九・五kgの体にランドセルを背
負った里奈ちゃんを抱っこしなが
らの帰り道。「大丈夫。大きくなっ
ても、ずーつと抱っこするよ。」そ
う応える私は、少し幸せで、少し
哀しくて、とんぼを目で追ってみ
たりしたのでした。

朝夕冷え込みます。どうぞご自
愛下さい。



養護メモ 103 家族に関わる その3 菅原 哲男

家族というなにやら得体の知れな
いエネルギーの固まりであるカオス
のようなものに関わるといいうこと
について、相当な覚悟が必要であるこ
とは前回書いた。

このところ、恋愛の連続と考える
結婚観はかなり収まりつつあるとい
われているが、結婚式などでの新郎
新婦の新しい家庭に関する意志的な
希望は「あたたかく、明るく、楽し
い」家庭を作ることであることを、
そう大きな違いなくそれぞれが決意
表明している。そのようにして家族
が形成されるのである。

家族が引き合う異性間によって共
に暮らすことを決意して生成したの
だが、それは得体の知れないエネル
ギーに満ちたカオスのような存在で
あり、そのエネルギーは、はじめ大
いなるプラスであったのである。そ
のプラスが新しいいのちを生み出し、
そのいのちはプラスのエネルギーの
総量を消費し尽くすかのように活発
に運動をし、授乳を迫り、泣きわめ
くのである。

そのいのちをいとおしみ、その成
長のみが親たちへの報酬となるので

ある。

育児が大変な煩わしさをもたらし
て、そのはたらきについて報酬がな
いことが昨今話題になった。サラリー
マンの所得税からの特別配偶者控除
がこの春から廃止されたのである。
そのとき、多くのマスコミは、配偶
者特別控除の賛否についてアンケー
トやインタビューを実施して報道し
た。いわゆる専業主婦が子育てをす
るための税制上の優遇は否かしかり
かについてである。

その論点は、育児労働についての
報酬などについてであったのである。
曰く、割に合うか合わないか。育児
や家事労働は市場原理において評価
されるべきである。あるいは、配偶
者特別控除を廃止して、月額五〇〇
〇円の児童手当を給付するから子育
て支援になる。といったものがほと
んどだったのである。

家族の起源については、お互いに
引き合う異性が同意して同居する、
そして新しいいのちの誕生を迎えるこ
とであることをもう一度考えてみよう。
人が人を愛し愛されるという関係な
のである。この関係性のなかに、賃

幣価値による利害である税の優遇に
ついて、すなわちカネにまつわる有
利不利などの要因がどうして入り込
むことになるのだろう。まして、そ
の視点からのかまびすしい論議につ
いて、待てよ、と考える人がいなか
ったのだろうかとも思った。もし、
マスコミがそんな意見を切り捨てて、
報道したとすればかなり人をバカに
したことで問題でもある。

モノやカネが人の行動や生き方に
関わる価値基準になって久しい。そ
してあなたもそれ以外ない様相で過
ぎてきた。同じ地平で論議すれば育
児や家事労働への反対給付の保証を
考えるべきだろう。そうでないと不
公平だったり、傷ついた！と言って
不平を言い立てる。

そのような思考基準による行動が、
この国の子育てや家事、家族のあり
方を規定してきた。案が良くて苦勞
は嫌だ。快不快が行動や思考の基準
であると言い換えてもいい。

それが、家族関係にある行動や価
値の基準であるところから、家族関
係の劣化がはじまったのである。
簡単な調理、便利な家事、気まま
な行動、効率的な育児！などが家庭
における家族が追求するすべてだっ
たとすれば、気に入らないことはし
ない、避ける。快さだけが求められる。

ところで、育児の大変さが言われ
て何十年になるだろう。性役割の見
直し、などなど、男女共同参画政策の
推進、フェミニズムのはたらきもあつた。
どうもうさんくさいのである。人
の暮らしにお上りが関与することがこ
んな具合に押れを生じさせるのであ
る。社会運動が強い影響をもたらし、
それに従わないとまるで石器時代の
遺物のように扱われることになるの
だが、本当にそんなものなのだろうか。
もつと自由で個別に営まれるのが、
愛に基づいた関係のありようではな
かったか。その家族に属する者たち
がそれぞれに判断し選択して営まれ
ていくものが家族などのインフォー
マルな関係であり内実なのだろうか。

貨幣価値や利用価値、商品価値と
は何の関係も持ち得ない場面が、愛
し合う人と人との領域だったのである。
それにしては、家族が病んでいる。

貨幣価値と交換を試みる保険金殺人。
利用価値が見えなくなつてする離婚
の増大。そして思うようにならない
と乳幼児など子どもを虐待してしま
ない集団が家族になり果ててしまつた。
アメリカの家族問題を二〇年遅れ
で追隨してきたこれまでのこの国の
あり方をもう一度見直していく営み
が、家族関係に関わる基準でなけれ
ばならないと考えてきた。

